類器官母斑，基底細胞上皮腫，アポクリン腺癌

— BCE とアポクリン腺癌を合併したと思われる 1 例 —

松浦 肇* 津田 道夫*

Summary

A 66-year-old female case of BCE associated with Apocrine carcinoma developed from organoid nevus on her scalp was reported.

はじめに

類器官母斑には基底細胞上皮腫をはじめとする種々の二次腫瘍が続発することが知られており^{1)~3)}，また，時に 2 種類以上の二次腫瘍の合併もみられる。今回，我々は，類器官母斑より発生したと思われる BCE とアポクリン腺癌の合併例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

症 例

症 例：66歳，女性

初 診：平成 4 年10月 7 日

家族歴：特記すべきことなし。

既往症：2 年前より高血圧にて内服加療中。

現病歴：生下時より頭頂部に脱毛斑があり，放置していた。3 年前より同部に痂皮を付着するようになり，徐々に増大してきた。また，時に痒痒感を伴い，搔爬により滲出液を認める様

になったため，平成 4 年10月 7 日当科受診となった。

初診時現症：頭頂部に16×22mm 大の不規則に隆起する表面平滑，一部顆粒状の赤色調腫瘤を認める。辺縁は光沢を有し，黒色調のところも認める（図 1）。

臨床検査所見：後に示す組織所見より内蔵悪性腫瘍の存在を疑い種々の検索を行った。血液一般，尿検査，胸部 X 線は正常。血液生化学で CEA が4.3ng/ml と軽度上昇を認めた。腹部エコーは正常。UGI にて胃，十二指腸にポリープを認めたが，同部の生検では悪性像は認めなかった。また，卵巣，子宮等婦人科的にも特に異常は認められなかった。

図 1. 臨床像

*Hajime MATUURA, Michio TSUDA：宝塚市立病院皮膚科

病理組織学的所見：腫瘍は部位により種々の形態をしめしていた（図 2 a, b）。

それぞれについて順に示す。

腫瘍の最も左側では、好塩基性に染まるやや小型で楕円形の核を有する細胞が巣状に増殖しており、周囲結合組織の増生を伴っている。また、周辺に柵状配列を認め、PAS 染色は陰性であった。これは典型的な BCE を示す所見と考えられる。その右側周辺に近いところでは BCE の腫瘍塊の中に一層の壁よりなる管腔形成を認め、また、管腔を形成する細胞と直接接しているところもある（図 3 a）。また、管腔壁は断頭分泌を示すところも認められる（図 3 b）。

BCE を思わす腫瘍の右側では、一見ページェット病を思わすような胞体の明るい細胞が、表皮内で巣状に増殖している。核分裂像、異形成も認められ（図 4 a）、そのうちの一部は明確な管腔を形成するものや、あるいは亀裂に

よって管腔を形成すると思われるものがみられる（図 4 b）。また、不規則で大きな管腔を形成し、腔内に絨毛様突起を示す腫瘍塊が真皮中に増殖している像も認められる（図 5 a）。その壁の内側はやや好酸性に染まる小さな細胞よりなっており、その周囲は表皮内でみられるような胞体の明るい大きい細胞が数層の壁を形成している（図 5 b）。腫瘍の最も右側では、結合組織の著明な増生を伴いながら、小さな腫瘍塊が、柵状にあるいは不規則に互いに連結しあって増殖している（図 6 a）。その腫瘍塊は明らかな管腔形成を示すものや全く分化を示さないもの、などが入り交じってみられる（図 6 b）。また、一見面皰癌を思わすような、胞体の明るい大きな細胞が充満しているような像もみられる（図 7 a）。また、腫瘍細胞は PAS 染色陽性顆粒を含んでおり（図 7 b）、それは、ジアスターゼにて抵抗性を示した。また、アルシアンブルーで

図 2 a. 弱拡大全体像（左側）

図 2 b. 弱拡大全体像（右側）

図 3 a. BCE の像を呈する

図 3 b. 断頭分泌を示す

図 4 a. 胞体の明るい細胞が表皮内で巣状に増殖

図 4 b. 管腔形成を示す

図 5 a. 絨毛突起を示す腫瘍塊の増殖

図 5 b. 強拡大像

図 6 a. 腫瘍塊は柵状あるいは不規則に連結している

図 6 b. 種々の組織型を呈する

図 7 a. 面皰瘡を想わす像

図 7 b. PAS 染色陽性顆粒を認める

陽性トルイジンブルーにてメタクロマジアを示した。

考 案

鑑別診断, 組織所見より, 転移性腺癌, アポクリン腺癌, エクリン腺癌の可能性が考えられた。転移性腺癌に関しては, 先に示した様に婦人科的検査をはじめとして, 種々の検索を行ったが, 原発巣を思わす所見は認められず否定された。エクリン腺癌とアポクリン腺癌の識別はしばしば困難な場合があるが, エクリン腺癌は比較的明確に分類されており, 自験例と一致するものはないと思われる。

一方, アポクリン腺癌の分類は明確ではなく, 種々の形状を示すものが含まれている。Raphael⁴⁾によるとアポクリン腺癌の特徴は次のようなものがあげられている(表1)。

(1)種々の組織型を示す。(2)腫瘍は表皮, 真皮, 皮下脂肪織にかけて及ぶ。(3)正常アポクリン腺がみられることがある。(4)均一あるいは顆粒状好酸性に染まる豊富な細胞質を有する細胞よりなり, 断頭分泌がみられる。などがあげられる。

表1. アポクリン腺癌の組織学的特徴
(Raphael L et al Arch Dermatol Vol 114 198 1978 より引用)

1. 種々の組織型を示す。
 - ・ papillary
 - ・ complex grandular
 - ・ anastomosing tubular
 - ・ solid cellular sheets
 - ・ cord like infiltrations with desmoplasia
2. 腫瘍は表皮, 真皮, 皮下脂肪織にかけて及ぶ。
3. 正常アポクリン腺がみられることがある。
4. 均一なあるいは顆粒状好酸性に染まる豊富な細胞質を有する細胞よりなり断頭分泌がみられる。

本腫瘍の特徴を述べると, 胞体の大きい明るい細胞よりなり, PAS 陽性, ジアスターゼで抵抗性, トルイジンブルーでメタクロマジアを示し, ムコ多糖類を含んでいると思われる。腫瘍細胞は明らかな管腔構造を示すものや未分化なもの, また, 表皮内病巣を形成するもの, また, 結合織の増殖を伴って柵状に増殖するものなど種々の組織型を示していた。また, 正常アポクリン腺および断頭分泌もみられた。類器官母斑では, 毛包, アポクリン汗腺, 脂腺系腫瘍を二次的に発生してくることが知られており, アポクリン腺癌を生じた例も報告されている²⁾³⁾。自験例では組織学的にアポクリン腺の存在は認めたものの, 毛包脂腺系の形成異常はなく, 類器官母斑とは断定できないが, 生下時より脱毛斑が存在したことより類器官母斑があったと推定される。酵素組織学的検査は行い得なかったが, 以上の臨床組織学的所見により類器官母斑よりBCEとアポクリン腺癌を生じてきたものと考えた。

以上, 類器官母斑より発生したと思われるBCEとアポクリン腺癌の合併例を報告した。

文 献

- 1) Walter, F.L.: Histopathology of the skin. 7th edition. : 594-596.
- 2) Morioka, S.: The natural history of nevus sebaceus. Journal of Cutaneous pathology, 1985, 12: 200-123.
- 3) Javier, D., Elson, B.H.: Malignant neoplasms associated with nevus sebaceus of Jadassohn. J. Am. Acad. Dermatol., 1: 545-556, 1979.
- 4) Raphael, L., Warkel, M.C. U., et al.: Apocrine Gland Adenoma and Adenocarcinoma of the Axilla. Arch Dermatol 114, 1978.